

岐阜教区第2組 正法寺 佐々木賢成

「あかお（赤尾）の道宗もうされそうろう。『一日のたしなみには、あさつとめにかかさじと、たしなめ。一月のたしなみには、ちかきところ、御開山様の御座候ところへまいるべしと、たしなむべし。一年のたしなみには、御本寺へまいるべしと、たしなむべし』と云々」。蓮如上人御一代記聞書の言葉です。真宗門徒の日頃のたしなみの中でまず起きたらお内仏のあさづとめをと、勧められています。法座等の場でこれを話すと必ず二つの返答が出ます。1つ目は、「我家は新家、分家なのでまだ誰も亡くなってはいません。ですからお内仏がありません」と。

今日ではもっともに聞こえますが、私は「いけません」と返します。何故ならお内仏は先祖壇ではないからです。本尊たる阿弥陀仏の教えに帰依する生活から、感謝の念仏を生み出してきたのです。ですから本家はその生活を大切に続けてもらいたいという願いと責任を持って、新家、分家にもお内仏を付けたのでした。お内仏を中心とした真宗門徒の生活の有り様が美しい人間の姿も育ててきたはずです。

御門徒の家庭にカンちゃんという小学六年生の子供があります。ここに、時候におとずれた女性がありました。玄関をはいった所でこの家のお父さんとカンちゃんが応対しました。女性が手土産を差し出すとお父さんはお礼を言ってから「カンちゃんお内仏にお供えて」と話すとカンちゃんは「ハイ」と言って、手土産をお内仏に手を合わせてお供えたのです。この様子を訪ねた女性がみており、なんて美しい姿の家庭なんだと感心されました。そのカンちゃんと父親との関係、さらに亡きおじいさん、おばあさんからの大切なものが引き継がれているのですね。頂き物はまずお内仏にお供えてから、下げさせてもらおう。こういう姿は美しいですね。でもお内仏の無い家庭では頂いたものはどうなるのでしょうか？いきなり食卓に並ぶのではないのでしょうか？

さてもう一つの返答が残っていました。それは「住居事情の関係でお内仏を置く場所がありません」と、これは何か勘違いをされています。何百代という大きさが無いとお内仏ではないのではなく、御本尊があるかないかでしょう。壁掛け本尊、三つ折本尊、で問題ないわけです。どうかお内仏のある生活を、真宗門徒としてのたしなみをおこたらないように。